レオニート・リパフスキイの「流動する世界」

——『対話詩』の解釈を中心に——

本 田 登

(東京大学総合文化研究科博士課程)

Leonid Lipavskii's "The World as a Waving Liquid": Towards an Interpretation of "A Dialogue Poem"

HONDA, Noboru

Graduate school of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Komaba

Abstract

The purpose of this paper is to interpret Leonid Lipavskii's "A Dialogue Poem," considering his view of the world.

Leonid Lipavskii (1904–1941) is a soviet philosopher, who is one of the members of the group "Chinari", which existed in 1920s' in Leningrad.

The form of "A Dialogue Poem" is, as the title says, dialogical. In this poem "choir" insists that people, who have alternation of generations, must live in a daily life. But "One person" denies not only its opinion but also his own corporeity.

From Lipavskii's view the world is waving liquid. If a frequency of one wave is different from that of others, then the wave is comprehended as an existence. The emotion of horror appears when the frequency of one's wave is going to synchronize with that of the world, which means a deprivation of an individual.

In earlier studies it was thought that Lipavskii considered the emotion of horror as something negative and even disgusting. But in fact Lipavskii himself desires the emotion. One of the reasons is that he thinks a deprivation of an individual as "Nirvana" in Buddhism. The other is that he wants to have a view of the world itself. When one tries to know the true aspect of the world, he must feel horror. For Lipavskii the emotion of horror pays his curiosity.

We can read his above-mentioned thought not only in his philosophical texts but also in the poem "A Dialogue Poem."

は じ め に

本稿では、レオニート・リパフスキイ（1904–1941）の作品『対話詩』の読解を通じて、彼

Keywords: Leonid Lipavskii, "A Dialogue Poem," The emotion of horror, The world as waving liquid, A deprivation of an individual

の世界観について考察する。

詩人としてのリパフスキイは活動期間も短く、作品自体もあまり注目されてこなかった。児童文学を除けば、彼が発表した詩は1921年の『対話詩』《Диалогическая поэма》と、1922年の『異国へ日は落ち……』《Солнце зашло в чужие страны …》および『汽笛を聞け！』《Слушай тягу, да!》の、「詩人ギルド」の文集に掲載された3篇のみで⁽¹⁾、評論や研究などによって言及されることもほとんどなかった⁽²⁾。

自作の詩が「詩人ギルド」というアクメистたちのサークルに受け入れられており、友人のドゥルスキンも、1910年代末にリパフスキイが中心となっていた詩人たちのグループについて、アクメистに近い側面があったとしていることから、リパフスキイをアクメистの最後の世代の1人として位置づけることができるだろう。しかしドゥルスキンはまた、同グループにはフレーブニコフやブルリュークら未来派への強い関心も見られたとも指摘している⁽³⁾。

リパフスキイは3篇の詩以降、哲学に専念するためとして詩を放棄し、哲学的な散文を中心に執筆するようになる。オベリウーの前身として位置づけられる芸術サークル「チナリ」が1920年代初頭に結成されると、リパフスキイは「チナリにおける理論家」⁽⁴⁾として中心的な存在となった。1927年にチナリはオベリウーへと発展的に解消されていったが、リパフスキイは引き続き、アヴァンギャルドの最後の巻き返しとされるオベリウーとも交流し、議論を重ねていった。

以上のように、リパフスキイはアクメイズム詩人として出発しながらも、未来派を始めとしたアヴァンギャルドの流れを受け継ぎ、それをオベリウーへと橋渡しする理論家としての役を担っていたといえる。

リパフスキイについての先行研究では、1930年初頭に書かれた『恐怖の研究』が主な分析対象となっている。この哲学的散文は、リパフスキイの思想において中心的な概念である「恐怖」についての考察となっており、彼の世界観を知る上では重要なテキストである。他方、本稿のようにリパフスキイの哲学的考察と『対話詩』とを関連させた研究はこれまでになされていない。

本稿で『対話詩』を分析対象として選んだのは、揺れ動く地面やクラゲといった重要なモチーフが登場するためと、対話という形式によって彼の世界観が明瞭に示されていると思われるためである。以下、『対話詩』を読解しながら、特に恐怖の概念に着目し、リパフスキイの世界観を明らかにしていく。

⁽¹⁾ Липавский, Леонид, *Исследование ужаса*, Москва, Издательство «Ад Маргинем», 2005においては、『異国へ日は落ち……』と『汽笛を聞け！』とは分けられておらず、1つの連続した詩となっている。しかし、初出である『詩人ギルド』の目次では分けて扱われていたこと、作品の内容がそれぞれ独立したものであることなどから、別の作品として考えるべきである。

⁽²⁾ リパフスキイに対する同時代の評価についてはウスティノフとコ布林スキイが簡潔に紹介している。それによると、『対話詩』には何か意図的に隠された深遠な思想があると評論されており、リパフスキイ自身も前途有望な詩人と目されていた。Устинов, А., Кобринский, А., “Дневниковые записи Даниила Хармса”, *Минувшее*, 1993, No. 11. с. 569. また、彼についての研究が不十分であったのは、作品の出版状況によるところも大きいと思われる。リパフスキイのテキストの多くは, Сажин, Валерий (сост.), «...Сборище друзей, оставленных судьбою», в 2-х томах, том 1, Ладомир, Москва, 2000. が初出となっている。

⁽³⁾ Друскин, Яков, “Чинари,” *Аврора*, No. 6, 1989, с. 104.

⁽⁴⁾ Там же. с. 103.

1 『対話詩』

リパフスキイの『対話詩』は、そのタイトルにあるように、「ある人物」«Один человек»と「コーラス」«Хор»との対話となっている。詩形式としては9連からなる自由詩で、各発話が連を構成している。

「ある人物」は、幸せそうに生きる日常の人々を目の当たりにしながらも、自分の足元が揺れ、波うつを感じる。その原因として「コーラス」は、「ある人物」が祖先たちを否定したことを挙げる。それに対して「ある人物」は、自分の存在は他の世代のためではないという立場から「コーラス」を退ける。

[引用 1]⁽⁵⁾

(第1連) ある人物

つかのまの寄せる波によって
このたまさかの岸にぶちまけられて、
とまどいながら私は見る、他の人々が
一瞬の太陽でその身を乾かすのを
未来のやさしさの為に巣をこしらえるのを
ひらひらと飛び回り、時折つばを吐き、
さまざまなことについて互いにさえざるのを……
ごきげんよう、お休みなさい！
他方で私の足の下では
大地が大騒ぎをする、
まさに目の前まで
空虚な波をもたげながら。
(略)

(第2連) コーラス

否定してはならないものを
おまえが否定したがゆえに、——
それゆえ、高慢で輝くお前の心は
死んだ目のように見える、
それゆえにお前の下ではまるで濁った海のように
大地が動いているのだ。
常に賢明で正しい祖先たちの
忘れられた塵芥に頭を垂れよ。
(略)

(第3連) ある人物

消え入りそうな炎の中に投げ込むために
衣服を与えられるのではない

⁽⁵⁾ 『対話詩』からの引用には便宜的に引用番号と連の番号を付す。

祖先や子孫達のために
 心と体を捧げることはなお悪い。
 はたして私は、言葉を話す間のなかった
 祖先たちのための口か
 はたして私は、まだあまりに弱い腕しかない
 子孫たちのための腕か (c. 301-302)⁽⁶⁾

「コーラス」は、樹木が地面に根を張り、葉を繁らせる様子を描き出す。そして「ある人物」に、人間は自由ではなく、日々の営みを愛するべきであると説く。「ある人物」と「コーラス」のそれまでの議論が他の世代との繋がりについてなされてきたこと、樹木が家系図の形状を思わせること⁽⁷⁾などを考えれば、ここでの樹木が人間の全世代を象徴しているという解釈が可能となる。

[引用 2]

(第 4 連) コーラス

木は根を下ろす
 固いしめった大地の中へ
 空中に広がった枝からは
 葉はとれにくい
 お前は歩くことも走ることも出来るが、
 それでも畢竟自由ではない。

(略)

薪のはぜる音や
 薄明かりの中にいることを愛せよ、
 頼りない羽団扇で
 天井が揺れながら覆われる時を。

(略)

日々の労働を愛せよ、
 そして夕べの踊りと
 何枚もの鏡に映る

ランプの言葉をも。(c. 302-303)

「ある人物」は、自分が好んで身体を得たのではなく、水から引き揚げられたクラゲをむしろ望むと述べる。しかし「コーラス」はそれを認めず、永遠に転生を繰り返す、生物として生殖を続けていかななくてはならないとたしなめる。この時、人は聖なる液体、すなわち血を子孫へと引き継いでいく、一時的な容器にすぎなくなる。

[引用 3]

(第 5 連) ある人物

私の指はざらついていて

⁽⁶⁾ 以下、テキストの日本語訳は引用者による。また、リバフスキイのテキストからの引用は Липавский, Леонид, *Исследование ужаса* により、ページ数のみを示した。

⁽⁷⁾ 英語には family tree という表現があるが、ロシア語でも генеалогическое дерево (系統樹) という名称は一般的である。

目は緑色。
私の退屈な身体よ、お前など欲しくはない。
私の希望は、
水から引き揚げられたクラゲだ。
私の中古の魂よ、お前は私のものではない。
心臓よ、私の七魄よ。
私が生まれたときには、
誰も私に尋ねはしなかった。

(第6連) コーラス

死をとおり抜けて
体から体へと潜りながら
際限なく生まれ続け
——何もかもうまくいかない——
(何もかもうまくいかない、と
叫び、痙攣に打ち震えるのも無駄ではない)
そしてお前は愛し、苦しまなくてはならない、
ラブソングを創り、
目を見ながら伝えなくてはならない。
それは後になって、神々や獣たちがしていることを
するためである。
生において唯一の重要なことを。

(略)

お前は他の目の中で目を開ける。
心臓は再び鼓動を打ち始める
ふたたび情熱を感じるために、
後でそれに退屈するために。
お前は聖なる液体の
ただの河床にすぎない。
お前は生というコインを
わずかな間だけ預かっている者でしかない (c. 303-304)

「ある人物」は過去および未来の記憶に至るドアを開けようとする。その「呪わしいドア」のせいで「ある人物」は現在という時間の中に閉じ込められ、過去や未来の記憶に触れることができない。そして、馴染みのない人たちや敵に囲まれながらそのまま眠るように失神する。しかし最後の連で彼は、そうした時間の制約を超越する。

[引用 4]

(第7連) ある人物

兄弟よ、辛い、私には辛い。
私は自分の記憶にノックをする。
未来の日々についての、
そして過去の夜についての記憶。

呪わしいドアを開け！
 私はここで、奇妙なものや
 知らない友人、敵たちにいかに囲まれているのか？……
 そして再び失神が倒れ込んでくる
 まるで四枚の白い壁のように
 まるであまりに小さな弟の上に
 かがみ込む四人の姉のように
 (略)

(第9連) ある人物

時間は絶え間ない犠牲
 生は絶え間ない追悼
 時間の不浸透をとおり抜け
 ものの根を見抜きながら
 そしてその葉を予感しながら
 私は自分の魂を持って通り抜ける
 まるで生まれつつある星を運ぶように。(c. 304-305)

以上のように、「コーラス」は、人は祖先から子孫へと血を受け継いでいく存在であり、第1連前半に描かれているような日常の生活を営むべきであると主張している。それに対して「ある人物」は、そうした世代の繋がりに組み込まれることを否定し、自分の身体をも拒んでいるのである。ドミトレンコとサージンはこの詩について、プラトンにおける魂を独自に解釈したものであると述べている⁽⁸⁾。身体を否定するというモチーフや対話という形式などは確かにプラトンと結びつけうる。しかし、「ある人物」が身体をどのようなものと考え、なぜそれを否定したのかといった説明はなされていない。

『対話詩』は彼の最初期の作品だが、そこに登場するモチーフはリパフスキ自身によってその後も考察されてきた。中でも波のように揺れ動く世界やクラゲなどの生物は、彼の他の散文でも繰り返し登場するものである。次章以下では、詩を書かなくなってからの彼を後期リパフスキととらえ⁽⁹⁾、その時期の彼の世界観について検討し、『対話詩』を読み直していく。

2 拡散する生の恐怖および波としての存在

(1) 『恐怖の研究』

リパフスキは自身の世界観について考察する際、恐怖という感情に着目し、それを『恐怖の研究』⁽¹⁰⁾ というテキストにまとめた。彼はそこで、子供がゼリーを怖がる様子や、クラゲやタコなどのように嫌悪を催す生物に共通する属性などを分析し、すべての生物は原形質のよう

⁽⁸⁾ Сажин, Валерий (сост.), «... Сборище друзей, оставленных судьбою», в 2-х томах, том 1, с. 19.

⁽⁹⁾ 1922年の『汽笛を聞け！』より後を本稿では便宜的に後期リパフスキとする。この区分はリパフスキの思想内容の変遷などに立脚したものではなく、また前期と後期の期間の差が大きすぎるなどの問題があるが、本稿は彼の哲学的散文を踏まえつつ『対話詩』を解釈することを目的にしているため、便宜的にこれを採用する。

⁽¹⁰⁾ このテキストは17の短い章によって構成されており、恐怖についての考察が随筆のように記されている。章によっては4人の人物による対話という形式になっているが、Цивьян, Татьяна, Семиотические путешествия, Санкт-Петербург, Издательство Ивана Лимбаха, 2001, с. 105 でツィヴィーノ

な、嫌悪を感じさせる流動体できていると指摘した⁽¹¹⁾。そしてそれらの物質が周囲に拡散しようとするとき、恐怖の対象となるとした。彼はこれを「溢れゆく、中央に集まらない生を前にした恐怖」страх перед разлитой, неконцентрированной жизнью (с. 30) と表現した。

別の箇所ではリパフスキイはパニックの恐怖についても考察している。以下は『恐怖の研究』で取り上げられた、昼日中に熱帯地方を独りで歩く場面である。

「どこにも人影はなく、あなたが聞く音は、ただ体の中で動いている自分の心臓の鼓動のみ。突然、取り返しのつかない不幸の予感があなたを捉える。時間が止まろうとしているのだ。昼間が鉛のようにあなたに注ぎかけられる。時間のカタレプシーだ！(中略) 古代ギリシア人も、この感覚を知っていた。彼らはそれをパンの神との出会い、パニックの恐怖と呼んでいた。これは昼間の恐怖だ。」(c. 21)

これは一見すると拡散する生の恐怖とは異なっている。しかしリパフスキイは、すべての恐怖は同じ原則に従って生じており、その現れ方が異なるのみであると指摘している⁽¹²⁾。

このような恐怖観はリパフスキイ独自のものであり、彼についての先行研究も、この恐怖の原則の解釈が中心となっている。ジャッカーは「均質性」«однородность» という概念に着目し、生物の根幹となる均質な物質が恐怖を感じさせると指摘した。そして、パニックを引き起こすような均質な時間を時間の不在と考え、それを死の恐怖と結びつけた⁽¹³⁾。セミョーノワは『恐怖の研究』とサルトルとの類似点を指摘し、不快な生物に対する恐怖を実存主義の文脈から解釈したが、パニックについての考察は不十分である⁽¹⁴⁾。この両者が恐怖の原則を実存主義的な死の恐怖と結びつけて解釈したのに対し、ツィヴィヤンは、均質性の恐怖は天地創造以前のカオスへの恐怖だと考え、日常的な状況によってではなく、世界の全宇宙的構造 космические структуры мира へと入っていくような対象や現象によって恐怖が引き起こされるのだとした。また、『恐怖の研究』で言及されている生命の発生はマクロコスモスにおいては天地創造に対応しているとし、恐怖が嫌悪とも結びついていることを指摘しながら、パニックと生物への恐怖とを統一的に説明した⁽¹⁵⁾。

前二者はそれぞれハルムス、ヴヴェジェンスキイに関する考察においてリパフスキイに言及したものであるためか、不快生物への恐怖とパニックとの関連づけや、彼の世界観についての考察などが必ずしも十分に展開されているとは言えない。それに対してツィヴィヤンは、カオスという概念で恐怖の原則を説明しており、彼の思想により肉薄したものとなっている。

しかし、これらの先行研究は全て、リパフスキイが恐怖を忌むべきものとして否定していた、という視座で共通している。

↑ ヤンも指摘している通り、それは考察に対する具体的な事例を提示する役割がある。質問によって他者の発言を促すというやりとりはあるものの、登場人物の間に議論は生じておらず、リパフスキイの考える例をさまざまな形で示すものとなっている。

⁽¹¹⁾ Липавский, Леонид, *Исследование ужаса*, с. 29.

⁽¹²⁾ Там же. с. 28.

⁽¹³⁾ Жаккар, Жан-Филипп, (Пер. с фр. Ф. А. Перовской,) *Даниил Хармс и конец русского авангарда*, Санкт-Петербург, Академический Проект, 1995, с. 162–164.

⁽¹⁴⁾ Семенова, Светлана, “*Метафизика русской литературы*,” том 1, Москва, ИД ПоРог, 2004, с. 473.

⁽¹⁵⁾ Цивьян, Татьяна, “Леонид Липавский: «Исследование ужаса» (опыт медленного чтения),” *Семитические путешествия*, Санкт-Петербург, Издательство Ивана Лимбаха, 2001, с. 110–112.

(2) リバフスキイのテキストに見られる恐怖の希求

これまで十分に指摘されていないことだが、リバフスキイのテキストには、彼がむしろ恐怖を積極的に求めていると取れる箇所が多く見られるのである。そうした例を確認しよう。

『会話』《Разговоры》⁽¹⁶⁾ というテキストには、リバフスキイの以下のような発言が見られる。

「ああ、固体の世界の中に住むのにはうんざりだ。戸棚や扇風機、蔵書、こういったものは必要だとも思わないし親しみも感じない。(中略) 私にはしばしば、個性というものが全く無価値に思える。まるで壊れてしまうのが自然で普通なことのような、水の上の泡みたいに。」(c. 195)

ここでは個の喪失が恐怖としては見られておらず、むしろ固体を拒否することで個性の価値を否定さえしている。

また、『会話』の別の場所でリバフスキイは、なぜ人間の中には恥ずかしくて忌まわしいものが含まれているのかという疑問に対し、身体と周囲との差が不明瞭な水棲生物の例を引きながら、以下のように答えている。

「汚さとは、よそのあるいは余計なものであり、それでいて基本的な物質である。」(c. 320)

ここでリバフスキイは、個と周囲との境界が無くなることを個の喪失の恐れとしてではなく、むしろ汚さが消失するものとして肯定的に捉えている。

では、『対話詩』においては個の喪失の恐怖はどのように扱われているだろうか。

『対話詩』の冒頭で「ある人物」は、大地が揺れ、液体のように波うつを見ることになった。「コーラス」によれば、その原因は「ある人物」がことさらに世代の繋がりを否定したためであった。「ある人物」は揺れる世界にも何ら恐怖を感じることなく、むしろ第5連では自分の身体を拒み、恐怖を感じさせる生物であるはずのクラゲを求めている。この時、個の喪失を恐れていないという点で、「ある人物」は後期リバフスキイと同じ立場にいることになる。

(3) 存在と波

恐怖に対するリバフスキイの態度をより理解するために、彼自身によるパニックの説明を改めて見てみよう。『恐怖の研究』内で彼は、湖にボートを浮かべた様子を想定している。

「ある人が、気づいたら霧に包まれた湖の真ん中にいた。周囲はみな一様に白一色である。すると無意識のうちに、次のような疑問が沸き起こってくる。世界は存在するのか。あるいはそもそもかつて世界は存在していたのだろうか。」(c. 35)

この箇所は、周囲が白一色となり、何かの動きや差異が一切感じられなくなったとき、世界の存在に疑問が生じ、それが恐怖を引き起こしていると読み取ることができる。だが、ここで結論を急がず、リバフスキイに独自の存在論をさらに検討しよう。

ジャッカーも指摘しているように⁽¹⁷⁾、リバフスキイは存在を相対的なものであると考えている。

「「存在する」「存在しない」と言うてはならない。「何かと何かの関係においては存在する」「何かと何かの関係においては存在しない」とする必要がある。」(c. 109)

⁽¹⁶⁾ 『会話』はチナリの会合における議論の断片をリバフスキイが対話形式で記録したとされているもので、1933年から1934年に執筆された。それが実際の会話をどこまで正確に文章化しているかという問題は残るが、リバフスキイ自身も話し手の1人として頻繁に登場しており、彼の考えを知る上では重要な資料である。

⁽¹⁷⁾ Жаккар, Жан-Филипп, *Даниил Хармс и конец русского авангарда*, с. 156.

そして、存在は周囲と異なる波であるとしている。

「あたかも2つの波が存在するかのような。人間の波と世界の波と。(中略)波が一致しないとき、それは存在であり、振動であり、時間である。」(c. 372)

「世界の波がわれわれに動いて感じられるのは、われわれがそれらすべてを別の波から眺めているためである。」(c. 372)

存在を波の違いとする彼独自の世界観を理解するため、まずはその正体が波であるとされていた、光や音といったものについての考察を見てみよう。彼はそれらをもの自体に備わっている特性ではなく、目や耳といった感覚器官による創造でもなく、「捉えられた周波数、リズム」であると解釈している。感覚器官が波を知覚するとき、「瞬間の内部にあるリズムが音や色、そして世界の他の性質を生じさせる。」(c. 95)

周波数あるいはリズムとは通常、ある一定の単位時間における振動の回数を表す。したがってそれは必ず時間的な変化を前提としている。しかしリパフスキイは、リズムは瞬間の内部に存在するという。

「瞬間の内部には時間が存在しない。変化(波)の連続は何か不変なものとして捉えられる。」(c. 95)

本来なら時間を前提としている概念であるはずの周波数やリズムが、「時間が存在しない」「瞬間の内部」にあるとはどのようなことだろうか。

彼は時間をも相対的なものであると考えていた。時間は物体の移動や状態の移り変わりなど、何かしらの運動や変化によって初めて生じるものであった。他方で、運動や変化をする主体であるところの存在は、リズムすなわち単位時間における振動数の違いによって生じるものであった。このように、リズムが成立するために必要な時間と、存在の運動や変化によって作り出される時間とは別なのである。

音や色は、人がリズムを知覚することによって初めて生じたが、リパフスキイはこうした考え方を色や音のみではなく、存在にまで応用していったのである。世界は波として存在しており、その中におけるさまざまな存在もまた波である。波の周波数がすべての箇所と同じである場合、そこには何も存在しない。周波数が異なっている箇所があれば、それが世界における存在となるのである。そして、以下の引用で抵抗と呼ばれているものは、世界の波と知覚との間にある関係性を指している。

「抵抗は、内部から観察されれば増大であり、外部からなら感覚である。増大一波一偏向一多様一対置一感覚一存在」(c. 93-94)

後半は左から順を追って見た時、存在のために必用な段階として読むことができる。世界という流動体が波となり、その一部に偏りが生じる。そして他の波との違いが明確になり、人間によって知覚されて存在となる。リズムのための時間とは、上の例では波の段階である。そして、最後に生じた存在が運動したり変化したりすることによって、リズムのための時間とはまた別の時間が生じるのだ。彼は「瞬間一個の変化が未だ生じていない」(c. 96)とも述べている。リズムのための時間は、個の変化によって生じる時間よりも前の段階のものなのである。

ただ、彼は2つの時間を厳密に区分しているわけではない。以下の引用のように、リズムの時間と存在による時間の違いもやはり、相対的に比較する対象の有無によって決まると考えていた。

「なぜ時間や一日をそのように(引用者註：瞬間として)とらえてはならないのか。なぜなら他のさまざまな変化との比較が生じているからだ。」(c. 95)

波のリズムは他に比較対象がなく、時間として捉えることはできない。したがって「われわれが瞬間の内部に感じるのは、波の交代 сменаではなく、その「公式」である」(c. 96)。すなわち、我々は波の動きそのものではなく、それによって作り出される色や音、あるいは存在を把握しているのである。より正確には、波の持つ特性を知覚することによって、色や音、存在が生じるのだ。

あらゆる存在を波と考えることは、存在の物質性にも疑問を投げかける。実際、リパフスキイにとっては存在それ自体もやはり動的なプロセスであった。

「物質性というカテゴリーは、虚構である。世界に存在するのはプロセスのみである。机というのもまたプロセスであり、モーターの抵抗力によって静止した形と静止した力とを保っている噴水なのである。」(c. 78)

存在を波と捉えるリパフスキイの世界観を踏まえれば、広くて静かな場所にいるときに感じる個の喪失の恐怖とは、自分という波の周波数が世界の波の周波数と一致していくことの恐怖と言い換えることができる。ツィヴィヤンは、カオスに対する嫌悪が恐怖の背景にあると指摘していたが、本章で考察したように、世界はカオスというよりむしろ波立つ流動体であるというべきなのである。また、不定形の生物に対する恐怖は、流動体としての世界を突きつけられることで、自身の物質性や存在そのものが不確かになり、個が喪失する不安を感じることによるものであるといえる。

では、リパフスキイがそうした恐怖を望んだということはどのように解釈すべきだろうか。

3 求める対象としての「個の喪失」

(1) 仏教への関心

世界を流動体として捉え、そこへ溶け込んでいくことで汚れたものが無くなるという考え方には、仏教における涅槃との類似が見て取れる。涅槃は仏教の究極の実践目的であり、煩悩を全て無くした悟りの境地である。それは煩悩のみでなく、肉体までも無に帰す状態を意味することもある。

実際に、『対話詩』にも仏教的思想が多く反映されている。作品中に登場する、身体を仮の住まいとして転生を繰り返していくというモチーフは仏教における輪廻であり、転生を拒み、世界の中へと溶け込んでいこうとする「ある人物」の究極目的こそ、涅槃であると解釈しうる。また、[引用 3] の第 6 連にある「何もかもうまくいかない」というフレーズは、輪廻から解脱し得なかったことを表している。そして「コーラス」はそれも無駄ではないという。「神々や獣たちがしていること」、すなわち繁殖行為をするために「ラブソングを創り、目を見ながら伝え」、子孫を残さねばならないからである。

リパフスキイの他のテキストからも、彼が仏教に関心を持っていたことが伺える。ヴヴェジェンスキイとの共作による詩のタイトルは『仏陀の雄牛』⁽¹⁸⁾ であるし、『水についての論文』⁽¹⁹⁾

⁽¹⁸⁾ この作品自体は散逸しており、内容を知ることにはできない。当時のリパフスキイのコメントによると、この詩は「未来派に同情的なパロディ」であるとされている。Сажин, Валерий (сост.), «... Сбо-рище друзей, оставленных судьбою», в 2-х томах, том 1, с. 18.

⁽¹⁹⁾ 1930 年代初頭に書かれたこのテキストは 4 人の人物の対話という形式であり、扱われている内容も『恐怖の研究』と共通するものが多い。議論として発展せず、さまざまな事例を提示しているという点でも『恐怖の研究』に類似している。

でも、登場人物の一人であるチャンピオンに以下のような発言をさせている。水の球となる。仏陀は、『対話詩』における「水から引き揚げられたクラゲ」を思い出させるものである。

「なぜ彼（引用者註：仏陀）は、まるで胎内にいるかのように足を組んで座っているのか？ 彼は水の球になりたいのだ。」（c. 8）

また、彼と行動を共にすることの多かったヴヴェジェンスキイは中国学を専攻しており、リパフスキイ自身もサンスクリット語を学んでいたことなどからも、リパフスキイが仏教を含めた東洋文化についての知識を得ていた可能性は十分にある⁽²⁰⁾。これらの点を考慮すれば、『対話詩』を仏教思想の側面から解釈することは十分に可能である⁽²¹⁾。

ツィヴィヤンはリパフスキイの世界観に、旧約聖書における創世神話との類似点を見だし、流動体の世界を天地創造以前のカオス状態として解釈した⁽²²⁾。リパフスキイは仏教的な文脈でも読み解きうるという本稿の指摘は、そうした従来の解釈に新たな視点を与える意義があると思われる。

（2）好奇心

リパフスキイが個の喪失を望んだのは、それが涅槃の境地であるからだけではない。流動体としての世界は恐怖ではあるが、その恐怖に肉薄し、存在は波であると実感することによって世界の本来のあり方を知ろうとしたのである。そのことは『恐怖の研究』の以下の箇所から明らかになる。

「早いうちに出発してしまった愛する人たちへの思慕のせいで、私は安らげない。（略）私たちは時間と空間とによって隔てられている。永遠に、そして完全に。しかし非常に強い好奇心が私を焦がす。私たちは、すべての物や存在になりたい——温度、波、変換に преобразование になりたい。会いたいという尽きない願いが私から去らない。」（c. 20）

これは、妻に先立たれた人物による心情の吐露として書かれている。「永遠に、そして完全に」「時間と空間とによって隔てられている」という箇所から考えても、「早いうちに出発してしまった愛する人たち」がすでに死去した親しい人たちを指しているものと分かる。ここで注目すべきなのは、死者との再会を願う感情を「好奇心」と呼び、「私たちは、すべてのものや存在——温度、波、変換になりたい」という表現を用いていることである。リパフスキイにとってあらゆる存在は波の周波数の違いによるものである以上、すべての物や存在になるというのは、自分の波が任意の周波数を取りうるということである。ここで存在の例として温度や波が挙げられていることに、リパフスキイの世界観が端的に示されている。

「変換になりたい」⁽²³⁾ という表現についても、リパフスキイの他の作品を検討することでそ

⁽²⁰⁾ 第5連に登場する七魄 семистрасник とは道教の用語である。精神を司る霊気を魂と呼ぶとき、肉体の霊気を魄という。ここからも身体の否定を読み取ることができるが、同時にリパフスキイが東洋文化についての知識を持っていたことも伺える。

⁽²¹⁾ 20世紀初頭の神秘思想家ビョートル・ウスペンスキイも、仏教におけるニルヴァーナ（涅槃）を主観と客観の区別がなくなる状態ととらえている。彼はまた、それを意識の水滴と意識の海との融合という比喩でも語っており、リパフスキイの世界観との類似が見られる。P. D. Успенский（高橋弘泰訳）『ターシャム・オルガナム』コスモス・ライブラリー、2000年、290-291ページ。

⁽²²⁾ Цивьян, Татьяна, “Леонид Липавский: «Исследование ужаса» (опыт медленного чтения),” *Семитические путешествия*, с. 112.

⁽²³⁾ ここで変換と訳出した単語 преобразование は一般的には、物理や数学などの分野において、波の周波数や波形を変えるという意味で用いられることもある。

の意味が明らかになる。彼は『連続性』《Последовательности》⁽²⁴⁾ というテキストの中で、「変換」преобразование についての考察を展開している。それによると、「変換」とは例えば「数学的な動き」であり、「感情、匂い、温度」などに代表される「変化」изменение と比較すると、前者には時間の概念が含まれていないという。そして「変化」には他との比較の可能性が広く存在するが、「変換」は比較が制限されており、独立したものであるとしている⁽²⁵⁾。「変化」は存在が成立して後に初めて生じうるが、「変換」はそもそもの存在を生じさせるためのものなのであり、これは上述した瞬間についての考察をも思い出させる。さらに『変換について』<О преобразованиях>⁽²⁶⁾ で彼は、変換とはプロセスであると明言している⁽²⁷⁾。ここで、机すらもプロセスと考えていたことなどを思い起こせば、変換になりたいというのはまさにリパフスキイ的な意味での存在、すなわち物質としてではなくプロセスとしての存在となりたい、ということなのである。だが、彼にとってはもともと存在のあり方はプロセスとしてのもののみなので、「プロセスになりたい」という表現はむしろ、存在をプロセスとして実感したい、プロセスとして把握したい、などと読み替えるべきである。この時、「変換になりたい」という感情が「好奇心」と呼ばれていたことも理解できる。

では、すべてのものや存在となって満たされる好奇心とは、どのようなものだろうか。それは『対話詩』の「ある人物」が最終的に獲得した視座で得られるものである。

「ある人物」は、第1連で流動する世界を知覚し得たものの、第7連では未来と過去の2つの時間から隔てられた現在の中に取り残され、馴染むことのできない日常生活に囲まれて苦悩している。言い換えれば、時間と空間とによって縛られている状態である。そして、4枚の白い壁によって表象されている失神によって、時空間の束縛から自由になっている。失神は「ある人物」のみで完結するものではなく、彼と周囲との関係性の中で意味を持つ。既に指摘したように、リパフスキイはパニックの恐怖、あるいは個の喪失の恐怖について考察する際、霧に包まれた湖を例に挙げていた。霧が一般的には白いものであることなどを考慮すれば、周囲を取り巻く白壁が倒れ込んでくる失神は、個と世界との差が無くなっていくパニックの恐怖と同じものだといえる。

続いて[引用4]の第9連で、「ある人物」は「モノの根を見抜きながら／そしてその葉を予感しながら」自分の魂を持ち運ぶ。ここで、世代の繋がりが樹木で譬えられていたことを思い出そう。「ある人物」に対して「コーラス」は、生い茂る樹木の葉は簡単には取れない、ということ述べていた。その場合、人間は一枚の葉であり、そこからは根はもちろん樹木全体を俯瞰することは不可能である。それはまさに、過去や未来の世代は知り得ないということをも意味している。対して「ある人物」は、時間という不透過なものを通り抜け、葉と根、つまり樹木全体を眺めている。われわれが存在しうるのは常に現在のみであり、過去や未来の間には「呪わしいドア」が存在しているのだが、時間の不透過とはそのような文脈で理解されるべきである。失神によってその不透過なる時間を通り抜けることで、彼は樹木すなわち世代の繋がりの外部に位置することになる。ここにもまた仏教における輪廻からの解脱を読み取りうる

⁽²⁴⁾ これは1930年代半ばに書かれたもので、「連続性」を4つの概念に分けた後、それらの相互比較を試みている。「変換」や「変化」は、そうした概念の名称である。

⁽²⁵⁾ Липавский, Леонид, *Исследование ужаса*, с. 83–85.

⁽²⁶⁾ 1930年代半ばの執筆と考えられるこのテキストは23の短い章に分かれており、上述の「連続性」の概念の1つであった「変換」についての考察となっている。

⁽²⁷⁾ Липавский, Леонид, *Исследование ужаса*, с. 77–78.

が、むしろ樹木全体を見通せるということに注目したい。樹木はもはや単に世代の繋がりを表象しているのみではない。「ある人物」が見通した根は「モノの根」корни предметовであり、樹木はこの世界における存在全般にまで意味が拡大している。

妻に先立たれた人物は、個を喪失して「すべての存在」となり、同時に自分の存在を波だと実感することで「好奇心」を満たそうとした。さらに時空間をも超越し、死者との再会の可能性をも得ようとしたのである。そして『対話詩』の「ある人物」は、波としての世界を目の当たりにし、失神によって個を喪失することで、第5連にあるような「中古の魂」ではない「自分の魂」を流動体としての世界の外部に位置させ、超越的な視点から世界を眺めた。世界の外部をどのようなものとして想定すべきかという問題についてはさらなる研究が待たれるが、何らかの超越的な視点に立って流動体としての世界を把握したいという詩人の「好奇心」が『対話詩』に込められていることは疑いない。

ま と め

リパフスキイは、世界を流動体ととらえ、その中での波の差異が存在であると考えていた。そして自分という波の周波数が世界の波と一致しようとするときに、人は恐怖を感じるのである。本稿においては、彼のこのような世界観はすでに1920年代初頭から醸成されており、それが数少ない彼の詩に色濃く反映されていることを指摘した。さらに、リパフスキイ自身は仏教における涅槃の境地として個の喪失を積極的に求めていたこと、そして哲学者として世界のあり方に関心を持ち続け、流動する世界を目の当たりにすることが恐怖を引き起こすとしつつも、超越的な視点から世界を把握するためにむしろそれを求めていたことを明らかにし、リパフスキイにおける恐怖を否定的にのみ捉えていた従来の研究に新たな視点を提供した。

世界や時間、存在などについてのリパフスキイの関心は、チナリからオベリウーへと受け継がれ、彼らの哲学的な作品に影響を与えていく。オベリウーが「チナリにおける理論家」リパフスキイの世界観をどのように受け止め、展開させていったかということについては、今後の研究課題としたい。

(本論は複数レフェリーの審査を経て編集委員会が採択したものである。)